慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	<把〔pə〕>を含む形式について：その統辞論的分析
Sub Title	The stylistic form of 〔pə〕 in the northern dialect of the Chinese language : syntactic analysis
Author	川本, 邦衛(Kawamoto, Kunie)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1959
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.9, (1959. 12) ,p.15- 36
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00090001-0015

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

〈把〔pə〕〉を含む形式について

――その統辞論的分析――

川本邦衛

唐代以前に於ては、〈把〔pə³〕〉が名詞又は動詞以外の機能を持つていたことは、一般に認められていない。名詞としてのそれは「器物の柄」、転じて「束」の意味をもつている。或いは更に転じて「ひとにぎり」の意にも用いられた；

侵晨送菜把。（晨を侵して菜把を送る）（杜甫）

盈把之木、無合拱之枝。（盈把の木は、合拱の枝なし）（韓詩外伝）

動詞については〈康熙辞典〉の、この文字の項に次のような説明が見える；

説文…握也、広韻…持也、増韻…執也、殷本紀…湯自把鉞以伐昆吾（湯自ら鉞を把りて以て昆吾を伐つ）

王力が昨年公刊した〈汉語史稿〉（三冊、科学出版社、一九五八年四月）によれば、[1]〈把〉が、唐代以前のみならず、以後に於ても、例えば、

歩人抽箭大如笛、前把両矛後雙戟。（歩人箭を引くこと大いに笛の如し、前に両つの矛を把れば後に雙つの戟あり）（韓翃詩）

毎冬月、四更竟、即勅把燭看事。（毎冬月、四更竟るや、即ち勅して燭を把りて事を看る）（南史梁武帝紀）

のように、純粋に動詞の機能を保つが、それが〈介詞〉の機能を帯びて、それまで〈動賓結構〉の形式の下にあつた文に、

醉把茱萸子細看。（醉いて茱萸を把りて子細に看る）（九日藍田崔氏莊）

莫愁寒族無人薦、但願看官把卷看。（寒族人の薦むるなきを愁うる莫れ、ただ官を看て卷をば看んことを願うのみ）（杜甸鶴詩）のような、統辞法上に変化を与えるために用いられる所謂形態語になつたのは、主に唐代前後からであるという。この結論は唐代を境として、その前後の言語作品を通考することによつて得られている。

では近代中国語についてはどうであろうか。〈把〉はそこでも同様に、名詞以外に二つのはつきり異なつた領域を占めているということができる。即ち、純粋の動詞としては、

他把着銭不給。（彼は金をにぎつてはなさない）

有両個兵把着後門。（二人の兵士が裏門を守つている）

のように発話に該当するし、他は〈介詞〉性の動詞とされて、所謂形態語としての機能、即ち

一定要把淮河修好。（どうしても淮河の堤防を補強しなければならない）

に見られるように、もともと動詞の後にあるべき〈賓語〉を前にひき出す意味を負うている。

本稿では、専ら、中国北方語にあらわれている、通常、前置動詞、或いは助動詞などとも呼ばれている、この後者の範疇に属している〈把〉の理論を解明し、その統辞法上の形式的な分析を纏めてみたい。

一

アンリ・フレエ（Henri Frei）の指摘した通り[2]、今日までに示された、形態語〈把〉に関する中国及び西欧の中国語学者達の伝統的見解は、概ねグローターズ氏―以下敬称略（Willem A. Grootaers）の論文 "Initial 'pə' in a Shansi dialect; a problem of grammar (T'oung Pao, Vol. XL II pp. 36～69)" の冒頭に概括されている通則に一致するように思われるが、それが、前述のように動詞の目的語を前にひき出す機能のみに関していわれているとしても、やや慎重に考えるならば、それは若干の訂正を免れないのではないかと考えたい。その通則は；

「〈pə〉は動詞の直接目的語を文首にもつていくことによる、正規の語序の変更の一方法である。（……）その動詞の直接目的語は、新しい文に編入され、そこでは〈pə〉の目的語となり、しかもこの語群は全文の冒頭におかれることになる」

一般に〈把〉を含む形式は、動詞の極く素朴な型――形態上の――については現われにくいようである。それらは略、次のような動詞の複合体について発話に該当する。

你把那狗撵開罢。（あの犬を追い払え）

他把小孩児嬌養慣了。（彼は子供を甘やかしている）

今児什広風児，把你吹了来了？（今日はどういう風の吹きまわしでやつて来たのですか）

有的把身子靠着舷栏。（舟舷に身体をもたせかけているものもある）

叙述の都合上、今最も単純な型を考えれば、

我把小刀児丢了。（P.S. 509.[3] 私はナイフを失くした）

は

主語＋〈把〉＋直接目的語＋他動詞

という統辞関係を構成しているが、これは明らかに

主語＋他動詞＋直接目的語

という直接的語序で発話に該当する

我丢了小刀児。

の変形である。勿論そこに異論の差挟む余地はない。しかし前記の通則と、この具体例を検讎するならば、それが若干の訂正を余儀なくさせられることは明らかであろう。尤もグローターズの措辞が、文の内部要素の位置関係では、特に必要のない限り文首に来るのはやはり主語であるのが、一応当然であるという前提をもつていると考えられないこともない。ただこのことを若干事細かに論うのは、後に判るように、〈把〉を含む語群が全文の冒頭に来るという点でその通則に全く一致する形式、即ち

把我擱稜瓣児碰疼了。(P.S. 77. 私は膝をぶつけて怪我をした)
把他弄到医院裡去了。(P.S. 246. 彼は病院にかつぎこまれた)

などが

你把線弄断了。(P.S. 253. 君がその糸を切ってしまったのだ)
我来把茶吹涼了吧。(P.S. 39. 私はお茶を吹いてさまそう)

や命令文(命令文は必ずしも主語を省略するとは限らないけれども)

把那張明信片児給我看看。(P.S. 13. 一寸その葉書を見せて下さい)

などとはっきり区別されて、存在を認められ、それらが〈把—形式〉の中で特に新たな考察を要するものであり、しかもグローターズの論文の主題自体が、このことに関しているからなのである。

そこで最も基本的で普遍的な〈把〉の機能を、私達は、前記の通則に今言ったような寛容な、そして譲歩的推察を行なった後にも、次のように言わなければならない。即ち、

「普通の〈主動句〉に於ける叙述動詞とその目的語の統辞関係は、動詞が目的語に先行するが、〈把〉はこの語序を変更するために用いられる文法的関係詞であり、〈把〉に前置された動詞の目的語は、動詞に先行することを許される」と。

しかし前に触れたことと関連のあることであるが、これはあくまで、普通の〈主動句〉の構造を基礎とした考え方であって、恐らくこれを墨守して一歩も出なければ、凡ゆる〈主動句〉はこれをすべて〈把—形式〉に変更出来ぬまでも、〈把—形式〉はすべて、これを〈把〉を含まない統辞関係——普通の〈主動句〉に還元出来るような錯覚に人を誘うかも知れない。そして又、同様にこの通則に忠実であろうとすれば、動詞の形態的分類によって、〈把〉によって目的語を前にひき出すことが常に可能ではないにしても、目的語を要しない動詞——これを中国語の場合に自動詞とよぶか否かは保留するとしても——は、少なくとも〈把—形式〉には見出されないと判断されるであろう。

第一の問題は、呂叔湘や王力の考察によって、一応の解答が出ているように思われる。うち王力の積極的な表現に対して、呂叔湘は限

定的にこれを行ない、〈把〉を用いずに表現可能な形式と、〈把〉を用いなければ全くそれが不可能な形式とを対比して説明しようとしている。それによれば左の八箇の言語作品のうち、前の四例は〈把〉を伴わずに構文されうるが、後の四例は、〈把〉を伴わない〈主動句〉に改めることは不可能である。[4] 換言すれば、それは常に〈把—形式〉を用いなければ不可能な方法の具体例なのである。

我把這個秘訣伝給你，你可別対外人説。（私はあなたにこの奥の手を教えるが、決して他人に話してはならない）

他把窗戸児関上，又把窗帘児放下。（彼は窓をしめきり、その上カーテンを下ろしてしまった）

他把那門軽軽敲了両下，只聴得一陣脚歩声，随即又消没声児了。（彼がその門を軽く二度ほどたたくと、ちょっとした足音が聞えたが、すぐに又聞えなくなってしまった）

還不快換雙鞋去呢，小心把地毯弄髒了。（まだ靴をかえないのか、絨氈を汚さないように注意してくれたまえ）

(a)要不是你説起，我可真把這件事忘得乾乾浄浄了。（若しあなたが言いださなかったら、私はこのことをすっかり忘れてしまったにちがいない）

(b)你把這段布先縮縮水再量量，看到底夠不夠。（先ずこの布を水で縮ませてから計り、それで結局足りるか足りないかをみなさい）

(c)他把銀子揣在懐裏，掉転身走了。（彼は銀子を懐に押しこむと、身を翻えして走って行った）

(d)我昨天下午把三本書都看完了。（私は昨日の午後、三冊の本を全部読み終ってしまった）

右の四例が、通常の〈主動句〉の語序によらない理由を、呂叔湘は次のようなものだと考えている。

即ち、(a)、(b)、(c)は、動詞の後に、〈止詞〉をその中間にはさめない或る要素が直接に接合している。又、別のケース(d)では、動詞の前に特殊の〈限制詞〉——例えば〈都〉のような——があり、〈止詞〉の後にそれが直接置かれなければならない理由が他に存在する。

斯様な意見の一部は、呂叔湘の他の著作[5]からグローターズ及びフレエによって引用されているが、[6] グローターズは、これを純粋に文形態（morphology of the sentence）に基く通則——〈格局〉を形態と解釈して——と考え、更に次のように説明を補っている。

「彼は（呂叔湘）、そこで十三の色々なケースを数える（……）；これらのケースの各々に於ては、動詞は動詞プロパー、プラス補語の複合体である。中国語はこの複合体を一つの全体と見做すが、しかし言語学的な感覚が、第二の要素を補語と見做す限りに於て、直接目的

語は〈把〉によって前にひき出されねばならない」

しかしこれに対しては、フレエは次の注意をつけ加えている。[7]

「Y. R. Chao はより用心深くこう言う。[8]『動詞が直接目的語と補語とを二つながらもっている時は』〈把〉構造は『常に実践され、』『より普遍的な言い方である』」

以上で、冒頭の説明を逆説的に補足するところの「如何なる場合に、〈把〉を含まない〈主動句〉は成立しないか」が一応明らかにされた。しかし呂叔湘の、例文(d)に関する条項をひとまず次章に保留するとしても、これに附随する他の一つの問題が考えられねばならない。それは、呂叔湘の例文の前の四例の何れにも含まれていないところの「動詞が単音節詞である場合」は、「〈把—形式〉は常に実践され得ないか」という問題である。

はじめに言ったように、これについては、王力が否定的な断定を下している。[9] それによれば通則としては、〈把—形式〉の後には、只一個の簡単な叙述詞は接合できない。それらが〈把〉を伴って発話に該当するのは、主に〈戯詞〉に限られるのであり、[10] 口語では皆無と言わぬまでも、極めて稀にしか見ないものであるという。

だが、私達はフレエの研究によって、この王力の断定には懐疑の目を向けざるを得ないことに注意する。

フレエは、〈把—形式〉を使わねばならないケースの規定「動詞の後に直ちに目的語を接合できない場合にのみ、〈把〉があらわれる」は役に立たないとして、[11] 動詞の反復によって構文が可能な例

他講書講的清楚嗎？（彼はわかりよく説明しますか）

をあげた外に、単音節詞の動詞が直接に目的語をとれる場合でも、〈把〉を伴うことが、可能な例として次のようなものを示している。

我想把那照像匣子売了。（私はあのカメラを売ろうと思っている）

他多半児把鑰匙丟了。（恐らく彼は鍵を失ったのであろう）

我把小刀児丟了。（前出）

我怕我把錢包児丟了吧。（私は財布を失くしたのではないかしら）

太太，太太，您把雨傘忘了。(奥様、奥様、傘をお忘れになりました)

咳糟糕我把自来水児筆忘了。(しまった、万年筆を忘れて来た)

咳糟糕我把雨傘忘了。(しまった、傘を忘れて来たよ)

よつて、王力の所説は再考の必要があることが明らかである。

以上で〈把—形式〉の基本的な通則は概ね明らかになつた。次に私達は、王力の所謂〈処置式〉について考えなければならない。王力の〈把〉に対する説明は、極めて積極的な分析に充ちているけれども、その観点はここで扱う問題と、少なからず距つていると考えられる。しかし、問題を発展させるために、これを無視することはできない。

〔註〕

(1) 王力；〈汉語史稿〉中冊・四一〇—四一八頁。

(2) Henri Frei; The Ergative Construction in Chinese: Theory of Pekinese PA^3. (Gengo Kenkyu. No. 31. pp. 22-50.) p. 40.

(3) Henri Frei; Two Thousand Peiping Sentences.(unpublished)から前註書に引用されているもの。数字は原著に於ける番号。

(4) 呂叔湘；〈中国文法要略〉上巻・五八—九頁。

(5) "Bulletin of Chinese Studies. Vol. VIII, 1948, 9."——W. A. Grootaers; Initial "pə" in a Shansi Dialect. p. 57.

(6) H. Frei; The Ergative Construction., p. 41.

W. Grootaers; Initial "pə", p. 58.

(7) H. Frei; Ibid., p. 41.

(8) Ibid., footn. ("Mandarin Primer, Cambridge, Harvard University Press, 1948, p. 162-§49.)

(9) 王力；〈中国現代語法〉上冊一六三頁。

(10) 柴王澶州把位讓。

爹爹在家把兒訓。

命人来把母女喚。

莫非秉蘭把他害。

右同、一七一頁、附註（這些例子也都出自滴水珠）

(11) H. Frei; The Ergative Construction., pp. 41-42. §3. 2. 2. 2. 2. ff.

二

〈把〉によつて展開される言語作品——文は、特に強制乃至執行を表現している場合が多いのは隠れもない事実である。それ故に、王力は、呂叔湘が単に〈把字式〉の名称を冠したこの形式を、その所謂〈造句法〉の他の五式と区別して〈処置式〉の名の下に概括し(1)、この形式が一種の有目的的行為、即ち〈処置〉を表わすものであることを執拗に強調している。換言すればこの形式の分析に当つて、王力は形態論的考察よりも寧ろ、この形式の慣用的な意味の領域を問題としているように思われる。

斯くて、〈処置式〉の概念の下に、この形式を包括しようと試みたために、王力の考察はより厳格な制限を〈把〉の用法に担わそうとしている。つまり、この点に関しては、規範文法的態度がより濃厚である。その結果として、王力によれば〈把—形式〉の分析されるべき領域が限定されているのは事実である。

最後に若干の譲歩を示してはいるけれども、王力は、一般に若し〈処置〉の意味が内包されていなければ〈把〉を伴う形式は利用されないという厳密な起点をもつている。従つて、その所説によれば、〈把—形式〉が次の各条項に該当する場合はあり得ない。補足的記述を添えて列記すれば；

(1) 動詞が一種の精神行為を内包している場合。従つて、〈我把他愛着〉はなく、〈我愛他〉（私は彼を愛している）があるのみである。

(2) 動詞が知覚現象を意味している場合。同様に、〈我把他看見〉は排斥されて、〈我看見他〉（私は彼を見る）がある。

(3) 動詞の表わす行為が、目的語の表わしている事物の状況に何ら影響を与えない場合；〈我把樓上〉よりも〈我上樓〉（私は二階にあがる）が運ばれなければならない。

(4)動詞の表わす行為が、偶然性を帯びている場合。例えば〈我拾了一塊手帕〉（我は一枚のハンカチを拾った）に対して〈我把一塊手帕拾〉は考えられない。

(5)〈存在動詞〉は把を伴うことはない。従って〈我有銭〉（私は金をもっている）や〈他在家〉（彼は在宅しています）は、その表現の唯一の形式である。

逆に〈把—形式〉によって表現の可能なケースは意義上五個の範疇に分類される。文法的にはそれは余り重要ではないが、具体例では次のように示されている。

(a)把你林姑娘暫安置在碧紗厨裏・（林のお嬢さまには少しの間碧紗厨に居てもらいましょう）

(b)等我把雲児叫了来，也叫他听听・（私が雲児を呼んで来ますから、あれにも聞かせてやりましょう）

(c)我把你膀子折了・（お前の肩をへし折ってしまうぞ）

(d)你把那穿衣鏡的套子放下来・（どうかその姿見のおおいをかけて下さい）

(e)那妙玉便把宝釵黛玉的衣襟一拉・（その時、妙玉は宝釵と黛玉のえりをちょっとひいた）

つまり何れにしても、そこには人物、物件、状況などに対してその行動、場所、進行などを支配する目的意識が働いていると説くのである。更に王力は〈把—形式〉の必須の条件を次のように単純な二個の結論に繰り入れてしまう。(1)

(1)他動詞の前に〈一〉がある時、

那妙玉便把宝釵黛玉的衣襟一拉・（前出）

宝玉把竿子一幌・（宝玉は竹竿をふりかざした）など。

(2)他動詞の後に形容詞又は形容詞性の〈末品補語〉が来る時、

把酒燙得滾熱的拿来・（酒を熱く燗をしてもって来なさい）

右の(1)は、前に示した呂叔湘の(2)の、(2)はその(1)の部分に相当するものであると考えられる。それ故に、この点に関しては呂叔湘の規定がより妥当な基準を発見していることは明らかである。〈一〉は〈都〉と同様、動詞に先行する一種の副詞であり、形容詞又は形容詞

性の〈末品補語〉は動詞の直ぐ後に、動詞とそれとの間に、直接目的語の介在を許さぬ要素だからである。

然し王力の理論で我々の最も注意すべきは〈把—形式〉のもつている内部要素の分析であろう。それは〈処置式〉がその何れかに属すべき標準の発見のためになされたために、我々の期待を全く満足させてくれるものではないが、〈把〉の後に直接目的語の来るケースの形態を、略言い尽くしているように思われる。それは一般的な〈把—形式〉の考察に際して照験されるべきものであろう。それによれば分析の結果、帰納して得られる〈処置式〉の必須条件は次のようなものである。

(1)動詞の後に〈末品補語〉、又は形容詞相当語句がある。例えば；

把酒燙得滾熱的拿来。(前出)

(2)動詞の後に場所を示す〈末品謂語形式〉がある。例えば；

晴雯伸手把宝玉的襖兒往自己身上拉。(晴雯は手をさしのべると宝玉の上衣を自分の方へひいた)

(3)動詞が〈関係位〉を伴つている。例えば；

把那条还我罢。(それを私に返しなさい)

(4)動詞が、後に〈数量末品〉に続かれている。例えば；

我把那門敲了三下。(私はその門を三度ばかりたたいた)

(5)それはアスペクトを示す要素を含んでいる。例えば；

由着奴才們把一族中主子都得罪了。(召使い共が一家の主人を馬鹿にするのを、ほつておくのかね)

或いは

他把書老拿着。(彼はいつも書物を手にしている)

斯くして〈処置〉を表現する〈把—形式〉の分析は全うされる。しかしこの範疇に属さないこの形式は全く無視されているわけではない。そこにより深い関心が寄せられなければならないと考えたいが、王力の取扱いは極めて不充分である。

即ち〈処置〉を示さぬ〈把—形式〉として、王力は、僅かではあるが、一種の派生の産物とみられる〈継事式〉の存在を注意している。

いわばそれは結果節の概念の下に扱われるべきもののように解釈されるが、それはただ単に〈処置〉を示さずに他の影響によつて生じた結果を示しているのみで、純粋に形式的な文法分析からは、それらの或るものと〈処置式〉との間に劃すべき一線は何処にもないのである。この相似の形式には先に〈処置式〉に於ける忌避事項に抵触する精神現象や知覚現象、及び偶然性の事件に関する動詞が含まれている。例えば王力は次のような例を示す。

(a)誰知接接連連許多事情就把你忘了。(ひきつづきいろいろのことで、思わずあなたのことは忘れていました)

(b)小紅聽了，不覚把臉一紅。(小紅は聞いて、思わず顔を赤くした)

(c)你何必為我把自己失了？ (何もあなたは、ぜひとも私のために、そんなに気ぬけしないでもよいではありませんか)

これらと、〈処置式〉のすべては、形式的には同一のものと見られる。従つて、〈処置〉に関する理論を無視すれば、王力のこれらの全ての形式は、〈把〉に直接目的語が続く〈把—形式〉の統辞関係に関する考察に平均して扱われてよい筈である。

だが、ここに全く看過できないのは、〈継事式〉としてあげられた中に混入して居り、しかも説明不充分のままに残された、他のケースがあることである。王力の二つの例文をみると、そこでは明らかに自動詞の使用が許容され、〈把〉は又目的語に前置するという本来の形態から逸れている。

偏又把鳳丫頭病了。(あいにく鳳ちゃんが病気になりました)

怎広忽然把個晴雯姐姐也没了？ (何故突然晴雯ねえさんまでがいなくなつたのでしょう)

グローターズはこのような形式が、すべて〈処置式〉から派生したという王力の説明に批判を加えている。氏はその試論の中で、形態論的分析は、最初に形式的でなければならぬし、共時論的見地と通時論的見地は明確に区別されなければならないとし、王力の見解を全く拒否している。(2) 恐らく、我々はその立場に立つて、〈把—形式〉の全く別の分類と見做して、これらに近づくのが至当であると考えられる。よつて我々は、前にたてられた〈把—形式〉の基本的通則「〈把〉は他動詞の直接目的語を前にひき出し、〈主動句〉の普通の語序を転換するところの……」といつた地点に止まるのを慎まなければならない。確かにこの場合には〈把〉と名詞の統合は文首にあり、その点だけに限れば、本論の冒頭に試みた訂正は不必要となろう。そこで訂正の加えられた通則には、更に「他動詞を含む文に於ては」と

いう制限条項が加えられなければならない、と考えられる。

〔註〕

(1) 王力；〈現代中国語法〉上冊、一六〇―一七一頁。
同　；〈中国語法理論〉上冊、一六四―一七四頁。

(2) W. Grootaers; Initial "pə", p. 62. ff.

三

前章までを要約して勘考すると、我々は既に示された唯一の〈把―形式〉に加えて、他の二種の語序を予想することが容易である。即ち〈把〉の前に主語を伴わない

(1)〈把〉＋目的語＋他動詞＋(x)

(2)〈把〉＋主語＋自動詞

である。(1)は命令文で、既にこれまでの引用文中に数例混入しているが〈把〉の前の主語は当然省略されていると考えなければならない。例えば；

把嘴閉緊了啊。(P.S. 32. 口をしっかり閉じなさい)

把那張明信片児給我看看。(前出)

把這些行李扛到税関上去。(P.S. 393. これらの荷物を税関まで担いで行っておくれ)

去，把時間表拿来。(P.S. 1729. 行って時間表をもって来なさい)

フレエは右の諸例を含めて、十七の〈把〉を含む命令の形式を掲げているが(1)、その中には、はっきり命令とは異なるものが二例混つている；

还不把鼻子擤了嗎？（それでもお前はまだ鼻をかまわないのか）

可別把戒指弄丟了。（決して指輪を失ってはならないよ）

前者は文法的感覚からは明らかに疑問文であり、他は禁止を意味している。後者は厳密にいえば無論命令文とは異なるが、禁止の副詞を伴う構文は統辞上否定命令文の範疇に入れられることが許容されるから、後者については触れないことにする。第一の文の構造については、フレエは特に注意を払っていないように思われるが、これが命令文と同様に、主語を放逐していると安易に考えるのは、全く間違っているとは言えないだろうが、賛成は出来ない。これに限らず発話の環境条件によって、主語を省略することは、近代中国語の屢々行なう方法だからである；

不是把老虎打死，就是叫老虎吃了。[2]（虎はうち殺さなければ、お前の方こそ虎に食われてしまうんだぜ）

従ってこれはあくまで、〈你还不把鼻子擤了嗎？〉によって考えられるべきであり、当然、本来の〈把—形式〉に含められなければならない。（この場合、命令文も勿論、その起源に於て主語は示されていたという通時論的意見は問題にしない）

(2)の形式について、王力がその体系に於てこれを殊更避けた理由を考えることは余り意味がない。恐らくそうした試みは臆測に終始するのみであろう。よって我々はこの事項に関しては殊更に他の学者の業績に頼らねばならない。

グローターズの論文（前出）は専らこの型にむけられており、この問題に対して他に我々の手がかりとなるものは、それ以前には見当らないので、先ずこれを検討して行くのが望ましいように思われる。但し、そこに扱われている資料が山西語の一方言であることは注意を要する。氏はそこで自らの蒐集になる用例を、(A)から(I)までの九種の型に分類している。[3] うち(E)及び(H)の各項に属するものは、問題にしようとしている観点から逸れており、これに対して(F)に分類されたものは、最も私の注意を惹くものである。それはすべて再録される価値をもっているが、順序として、全体の分類の検討から入って行くことにする。

グローターズの分類に於て

(A) 〈把〉＋直接目的語＋動詞

把你們的門限踢達了。（私はよくあなたの家をお訪ねしました）

(B) 〈把〉＋直接目的語＋動詞＋直接目的語

把門鎖住他吧。(〈彼が入ってくるから〉門をしめなさい)

は同一の範疇として考えられるべきであり、

(D) 動詞＋〈把〉＋直接目的語

買去吧把我的皮球。

は、(A)の変形と考えられる。そして方法的には、これらはすべて

(C) 主語＋〈把〉＋直接目的語

我們給神父把書整好。(みんなで神父さんの本を整頓しよう)

のパターンに統一される。更にグローターズによって説明のつかないグループとして挙げてある中の

把路尋不着。(道がみつからなかった)

も又これに属するであろうし、その残りの

把路跑那兒去？ (道はどっちにつづいているのだろう)

把路没了。(道がなくなった)

は共にこれを(F)の範疇に入れることができる。

(G) 動詞＋〈把〉＋主語

流下去了把水。(水が流れ出てしまった)

も、

(F) 〈把〉＋主語＋動詞

把燈没了。(灯りが消えてしまった)

の変形である。こうすることによって、グローターズのリストは、分明な二つのより大きい群に分けられる。これからとりあげるのは、

後者であることは言うまでもない。

グローターズは論中、類似の形式は、ミュリー（J. L. Mullie）の蒐集になる熱河語にも見られると言う。[4] 一方、フレエは、この形式、即ち〈把〉の補語がその文の主語であるケースは、特に北京語に於ても珍しくないという指摘を行なつている。[5] フレエは、グローターズにならつてモリス・クーラン（Morris Courant）が、〈把〉に主語の続く形式を見慣れぬものとし、マスペロ（H. Maspero）がそれが強調であるとしたことに一顧を与えているが、更に、ミュリーを評して、彼がすべての〈把〉に続く名詞（それが目的語であろうと、或いは主語であろうと）に、「限定対格」なる名称を冠して、呂叔湘と類似の見解を示しているという。これらのうち、私自身はマスペロの結論に惹かれるのであるが、フレエは、この何れにも重要性を与えていない。

グローターズの主張によつて、我々は〈把〉が目的語に続かれている形式の他に、それが主語に前置しているパターンの存在を近代中国語に普遍の現象として確かに求めはするが、これについてフレエの掲げている最初の例は、その予想を裏切つているように思われる。つまりフレエは、この形式が更に二種に分類をされ得る例を示しているが、その最初のグループは、〈把〉の意味論的研究への基礎とはなるであろうが、実のところ、統辞論的研究には余り意味をなさないと私は考えている。

フレエによれば、「名詞＋〈把〉」の統辞関係は、これを「〈把〉＋名詞」に容易に変更され得る可能性もつており、[6] この時、〈把〉の補語は文の主語と判断され得るという。そして、特にこの形式は、〈把〉の前では主格であつた主語が、属格になるように、その後にもつて来られたものと同一であると説明する。例えば、次のような例が、そこでは証明されている。

我怕把我錢包児丟了。（私の財布がなくなつたのではないかと思います）

把我背梁摔疼了。（私はころんで背中を痛くした）

把我包児放在大門道児那児了。（私は包みを戸口に置きわすれました）

把我自来水児筆忘了。（私は万年筆を忘れた）

把我像片児釘在牆上了。（私は壁に写真をかけました）

把我那封信撕的紛々児碎了。（私はその手紙を粉々にひき裂いた）

把你線弄断了。(君はその糸を切ってしまった)

把你尺放在那兒了？ (物差を何処におきましたか)

把他臉都気紫了。(彼は怒って顔色を変えた)

しかしながら、フレエ自らの証明によって〈我怕把我銭包児丢〉が〈我怕我把銭包児丢了〉の変形であることを知れば、今右に並列したような文は、結局〈主＋〈把〉＋目的語＋動詞〉の形式の下でしか考えられない。だとすると、王力の著作に見えた〈偏又把鳳丫頭病了〉とこれらとの間には、かなりの距離があると考えざるを得ないのである。換言すれば、それはグローターズの(F)のグループの形式とは截然と区別されて認識されなければならないと私は考えている。そこで(F)のグループを左に再録すると；

(16)把燈没了。(前出)

(17)把買糧食的時候過去了。(食糧を買いこむ時が過ぎてしまった)

(18)把個狼驚走了。(その狼は驚いて逃げ去った)

(19)怕把聖体跌那裡頭。(聖体がそこに倒れるのではないかと心配だ)

(20)把英神父悩的没辦法。(英神父がおそろしくおこっている)

(21)把我端乏了。(私は大変疲れました)

(22)把個二小子死了。((彼の)) 次男は死にました)

(23)把那個好人就死了。(あんなに善い人が死んだんですって)

(24)把他姐姐煽惑了。(彼の姉は((彼を)) おだててまどわしている)

(25)把他們多会兒来。(彼等は何時来ますか)

(26)把両個女子同死了。(その娘達は二人とも死んでしまった)

(27)把房子塌了。(家がこわれた)

(28)把狼来了。(狼が来た)

(29)把那個人死了。(あの人は死にました)

(30)把老百姓都跑出来。(人々は皆逃げ失せた)

(31)把腰壊了。(腰骨が捩れた)

(32)一抽大烟把人壊了。(一度阿片を吸うと、人間はだめになってしまう)

(33)把軸也壊了。(車軸もこわれてしまった)

(34)把他父親死了。(彼の父が死んだ)

(35)把那小的都来了把小的没了。(小さいやつはみなやって来たから、もう小さいのはいません)

(36)把本堂忙了。(牧師さんは今忙しい)

(37)把守古物的嚇的大顫。(古物商は身体をふるわして怒った)

このうち(32)は〈人〉が、主語ではなくて、〈一抽大烟〉が主語に該当すると考えられるからこれはこのグループから省かれた方がよいと思われる。

右を通覧すると、前述のフレェの挙例と細かく比較検討するまでもなく、両者が全く別個のものであることが判明するであろう。前にも述べておいたように、ミュリーは熱河語にこの構造の典型的諸例を発見していると報告されているが、それらを孫引きすると;

你常預備一様的飯把人都吃夠了。(お前がいつも同じ料理ばかり用意するから、皆が厭きてしまったよ)

把我気的一天也没吃飯。(私はあまり怒ったので、その日は一日食事もとらなかった)

把他忙的連話都顧不的説。(彼は大へん忙しくて、話をする閑もない)

把小過掉井去了。(小過が井戸の中に落ちた)

神父上才数了把鬍子都白了。(神父さんも年をとったものだ、ひげがまっ白だ)

活計盡自不過来把個把児頭还病了。(仕事は全然はかどらないし、おまけに職工長まで病気になった)

などであるが、ミュリーは限定対格、即ち前にもいったように、〈把〉に続く名詞は、ある慣用的表現に於て、殊に受動態の動詞に対し

て用いられるとしているという。[7] 言い換えれば、受動態の動詞の主語と目される語は限定対格として発話に該当し、動詞は主語を失つたまま能動相の形態で残るとしているわけで、ここで再び、統辞関係は全く同一でありながら、王力の文と異なる事例に我々は遭遇する。従つて山西語と熱河語に於て偶々一致する、この形式はやはり別個のものでなければならぬ。

ミュリーによつて熱河語の場合を一考するに、

把羊吃了。（羊が食われた）

は、〈叫〉及び〈把〉をもつて成立する受動態の発話、

叫狼把羊吃了。

から、行為者が脱落して導かれ、それは依然として受動態として理解されるというが、これは山西語のリストを通覧して得られる基準からは、肯定され得ない。恐らく山西語では、それは（羊が食つている）としか理解されないという推測は正しいであろう。然し、〈把羊吃了〉が受動態であつて、これに関連して、

他把個娘們児死了。（彼は妻に死なれた）

が理解されるということは限定対格に続く動詞が実際に自動詞であるか否かの問題につながつて来る。

〔註〕

(1) H. Frei; The Ergative., p. 42, § 3. 3.

(2) 愈敏；〈語法和作文〉一九五五、練習9。

(3) W. Grootaers; Initial "pə"., pp. 39–48.

(4) Ibid., pp. 49–51, p. 49. footn. (1).

(5) Frei; The Ergative., p. 42.

(6) Ibid., footn. 10.

(7) Grootaers. p. 49. ff.

四

グローターズによつて報告された、〈把〉が主語を導く形式は、北京語に於けるその存在を充分予想させるものである。これに関する問題点は王力によつて殆ど無視されていることは、前に述べた通りである。即ち、そこでは実際、この形式が北京語の慣用であるか否かも不明のまま残されているように理解される。ここで、もう一度フレエの記述にその手がかりを求めてみたい。

前に検討したフレエの文例は、〈把〉の前に置かれた主格の主語が、その後に置かれた属格の主語と文法的には一致するケースであつた。このケースに於ては、扱われているのが代名詞によつて占められていたが、これとこの後に続く名詞との統合は、この発話に於ける主語であり、そして又更にこの後に位置する動詞は所謂自動詞であると考えられる。事実、この場合、それらの要素を分析した結果、他動詞と目的語の位置が転換されているのだとする考え方を拒む有力な資料的根拠はないけれども、それらの動詞を自動詞として理解することの方が、他動詞としてのそれより遙かに自然である。従つて〈我把銭包児丢了〉と〈把我銭包児丢了〉の二個の発話に於て、事実上前者の〈丢〉は他動詞であり、後者のそれは自動詞である。そして一方後者の〈我銭包児〉は、主語と判断されるのである。この見地にたてば、この形式は、山西語に於て、文首に〈把〉の位置する形式と、統辞上は全く同一と見做されるであろう。

しかしながら、この考え方に対しては、恐らく次のような反論が予想される；

「〈把〉の前には、その後に位置するのと同一の代名詞が本来あり、このケースに於てはそれが省略されている」

そこで、この点についてはより深い思索と研究が要求されなければならないが、しかし一方最初の形式に於ては動詞が他動詞であるのが自然であるように、第二の形式に於てもそれが同様に自動詞と理解されるというのは、主に中国語の動詞が生得する性格に由来しているのである。

一般に中国語に於ける動詞の機能的分類は極めて漠然としている。(1) 無論、中国語の動詞も又、他の多くの言語と同様に、通常二種の状態を保つて居り、その分類は動詞の後に目的語を必ず要求するものと、然らざるものとの差異によつてなされ、前者を〈及物動詞〉——

他動詞、後者を〈不及物動詞〉――自動詞とすることは言うまでもない。本稿でもこれらの術語は専らそれのみによつて使用されて来ている。王力は、この分類について次のようなリストを与えている。

○及物動詞；喝茶、吃飯、洗菜、給錢、交朋友、打听消息、尋人、惜食、抱孩子、找房子、拿東西、到抗州、過節、在家

○不及物動詞；他哭、你笑、鳥飛、馬跑、哥哥坐、妹妹走、媽媽睡、張先生来了、李先生去了、一個人死了

しかしここで重要なのは、この分類が極めて明確な分界線によつてなされているにも拘らず、実際の一個の動詞の機能については甚だ曖昧な考え方をせざるを得ぬを指摘し得ることである。王力はそれを動詞の変態という考え方で整理している。具体的な表現をとるならば、前述の〈不及物動詞〉が、その本来的な方法から脱して目的語をとることや、〈及物動詞〉が目的語を全く無視することが、中国語の動詞の常態の一つであると考究されるのである。この場合「本来」という言葉は一体何を意味するだろうか。それは単に、そのケースをより多く発見し得るという不明瞭な意味に過ぎなくなるのではなかろうか。つまり中国語の動詞については、任意の一個の動詞は、少数の例外を除いて、形式上二つの領域を甚だ安易に往来できるのであり、換言すれば、一個の動詞が両種の機能を保つているということである。例えば、〈我笑〉と〈我笑他〉と比較することによつて、この種の分類が、中国語には無用であるという結論さえ導かれるであろう。

斯くて我々は〈把我錢包児丢了〉の〈丢〉を自動詞と解することに何の躊躇も要らないのである。従つて、ここにある〈我錢包児〉は形式上主語であることも容易に納得される筈であり、想像されるような通時論的反論にも考慮を与える必要がないと思われる。

だが、しかし、フレエの示す他の例はこれとはつきり区別されて認識されるべきものを含んでいる。フレエはたまたまこれらとはつきり断絶する意志を示さずに、即ち両者の間に明確な一線を引かずに次のような例を別に示している。これらが一人の中国人（張豪安）によつて〈把〉を用いずに表現され、更に他の一人（盧希微）によつて、要素間の位置的関係に何ら手を加えることなく、〈把〉をつけ加えられたという点は大いに注意しなければならない事実であろう。(2)

把他骨頭摔折了・(P.S. 95. 彼の骨が折れた)

把你襯衣児長出来了・(P.S. 321.)

把個猪跑了・(P.S.1190. 豚が逃げだした)

遠遠児的把一隻船露出来了・(P.S. 1293. 遠くに一艘の船が現われて来た)

把你手都凍了・(P.S. 1379. あなたの手はまつたくかじかんでいる)

右のうち(95),(321),(1379)は、形式的には、先のグループに同じである。そして、これらに対しても前に述べたような懐疑がむけられるかも知れないが、しかしそれが〈把〉の有無に関係なく、他の要素が同一の統辞関係を保ち得るという事実は、これを全く否定するものと考える。加えて残余の二例に於ける各要素の排列は山西語の方法と完全に対応しており、而も表現形式も又同一である。これらも同様に〈把〉を含まずに行なわれ得る事実は一体何を意味するであろうか。少なくとも、右五例については、〈把〉は強勢の目的で文首に冠されたと判断する以外、如何なる解決も徒労である。前に、マスペロの結論に些か注意を払つた所以は実にここにあつた。〈偏又把鳳了頭病了〉、〈怎広忽然把個晴雯姐姐也没了〉に対しても、我々が分析し得るのは、単にこの事実のみである。〈把他爹病了〉[3]についても、このことは考えられるであろう。更に〈他骨頭摔折了〉を含むグループに対しても、この解釈の適用が導かれ得る。

依つて我々は、北京語に於て自動詞を含む〈主動句〉の強勢構文〈把+主語+自動詞〉の形式を、他動詞を含む通常の〈主動句〉が〈把〉によつて語序の変更を結果された〈主語+〈把〉+直接目的語+他動詞〉の形式の他に分類せねばならない。

前者に於て〈把〉は、強勢の音調を導くための法性の助動詞であり、後者に於ては、部分的には、——即ち〈把〉を用いずに構成され得る形式も考えられる形式に於ては、語序の変更によつて、話者の心的態度をより広く指示するための、又〈把〉に拠らなければ、構文が不可能な形式に於ては、文法上の純粋な手段によつて動詞形態のあらゆる可能性をもたらそうとする前置詞即ち、介詞であり、両者は軽声で発話されることによつて動詞〈把〉と明確に区別される。更にこの両方の形式には、グローターズが山西語に分類したような、いくつかの派生的形式がそれぞれ附随しているであろう。そしてそれ以外の〈把—形式〉を考えることは不可能である。

即ちフレエのいうように[4]〈把〉の後に主語が他動詞及び目的語を伴つて発話に該当することはあり得ない。確かに我々は〈他気死我了〉という〈主動句〉に対して、〈他把我気死了〉と〈把我気死了〉を連想するけれども〈把他気我死了〉のような形式を考えることは出来ないのである。とまれ、フレエはこれらの点に鑑みて、動詞の附随的要素によつて二種の動詞の領域を分類しようとする[5]。そしてそれは、

〈把〉の統辞論的研究よりも、寧ろ意味論的研究に基いている。即ちそれらの第一は、他動詞の目的語と自動詞の主語とを同様に取り扱い、他は専ら他動詞の主語のみを含むのである。従つて動詞の分類は、主語と目的語の対立にあるのではなく、所謂他動詞の主語と、自動詞の主語及び他動詞の目的語にあるわけであるが、この体系に於ては他動詞、自動詞及び受動態、能動態の差別はまつたくない。このような考えの下に、フレエは ergative construction を考究する。論文の脚註によれば、それはマシュウズ（W. K. Mathews）の用語の踏襲のように推察されるが、フレエは中国語は複雑な構造をもつ言語であるが故に、意味論的研究によつてたてられる分界線に従つて、ergative と non-ergative の二つのディマーケイションに分けられるという。純粋に形態論的研究が拒まれて居り、統辞論的研究に於ても多くの困難を発見する時、意味論の領域よりのこの発言は貴重である。そして、無論、これは中国語に対する純粋に形式的文法分析は、三種の意味論的方法によるという思想と無関係ではない。[6] そしてそのような中国語の分析の成否は、そこに賭けられるとも言い得るが故に、その方法には、厳密な検討が加えられるべきであると思う。本稿は、そこに到る基礎的作業として書かれたことを明記しておく。

〔註〕

(1) 王力；〈中国現代語法〉八〇—八二頁。

(2) H. Frei; The Ergative., p. 43.

(3) 〈紅楼夢〉二十回。

(4) H. Frei; The Ergative., p. 45.

(5) H. Frei; The Ergative Construction in Chinese (in Gengo Kenkyo, No. 32. pp. 83-115.)

(6) 川本、〈近代中国語に対する形式的文法分析について〉（塾創立百年紀念論文集）§2 参看。

（一九五九年九月）